

城の「位置」と「つくり」から幕藩体制を読み解く小学校歴史学習 －江戸時代に築かれた「明石城」を事例として－

Learning History in Elementary School for Read and Understand about the Shogunate System by Place and Structure of the Castle : A Case of the Akashi Castle Built in Edo Period

石田 誠* 米田 豊**
ISHIDA Makoto KOMEDA Yutaka

本稿では、歴史学習における城の教材価値を、①時代を解明する物質資料になること、②城を考察することが当時の人々の視点で社会のしくみを捉えることにつながる事、③城を考察することが時間的、地理的、政治的な視点での理解につながる事、と整理した。そして、城の築城や補修、改築に関して幕府による統制が図られた江戸時代の城に着目し、城を考察する視点と問いを、「位置」と「つくり」による枠組として示した。「位置」に関する考察視点は、①地形、②自然との関係、③交通（街道、港）との関係、④城下町との関係、⑤他の城との関係、⑥政治的な関係である。「つくり」に関する考察視点は、①縄張、②建築物である。また、この枠組に基づいた学習過程を示した。そして、この考察視点と問いの枠組、学習過程に基づいて、江戸時代に新規に築かれた明石城を教材とした小学校歴史授業を開発、実践した。

実践の結果、児童が明石城に対して時間的、地理的、政治的な考察を行い、幕府の意図、目的と城に現れた具体とを関連付けて理解することが分かった。本研究で示した城の「位置」と「つくり」に関する考察視点と問いの枠組、学習過程に基づいた歴史授業は、幕藩体制を理解することに有効性が見られた。

キーワード：小学校社会科、歴史学習、城、明石城、江戸時代

Key words : social studies in elementary school, learning history, castle, akashi castle, edo period

1 問題の所在と研究の目的

(1) 城の教材価値

文化遺産の一つに、城がある。城は、最近多くのメディアで取り上げられ、各地域の観光資源として活用されている。そのような城に関して、当時の支配者がなぜ城を築いたのかを読み解く研究がなされている⁽¹⁾。千田嘉博は、「城を生み出した社会と権力の構造を読み解いて、物質資料から城の時代を解明することこそ、重要なのではないのでしょうか⁽²⁾」と述べている。現在に残る城の位置は、当時の位置と同じである。また、城は、その「つくり⁽³⁾」を現在に確認できるものが多く存在する。城は、それが築かれた時代を解明する物質資料として活用される。また、城は、その土地を治めていた支配者によって築かれるため、その支配者が生きた当時の体制と直結する。つまり、城は、当時の社会のしくみを読み解く資料となる。

山本博文は、「歴史にはその時代の固有のルールや時代的な要因があり、現代の感覚で安易に過去を見ないことが大切です⁽⁴⁾」「当時の人々の視点から歴史的事象を理解しようとする姿勢が重要である⁽⁵⁾」と述べている。城は、当時の支配者が、当時の政治的な体制のもと、ある意図や目的をもって選択、決定した行為の結果である。したがって、城を築いた意図、目的を読み解くこと

は、当時の人々の視点で、当時の社会のしくみを因果関係で理解することにつながる。

さらに、なぜその城が築かれたのかという問いを設定し、因果関係での解明を図ろうとする場合、築かれた当時の社会のしくみを考察する時間的な視点（いつ）、政治的な視点（何のために）だけでなく、城が築かれた位置を考察する地理的な視点（どこに）も必要となる。つまり、城は、時間的、政治的な理解に加え、地理的な理解を関連させた歴史学習の教材となる。

先行授業実践では、高等学校の日本史で、福田喜彦の熊本県荒尾市の中世城館を取扱った実践がある⁽⁶⁾。その実践では、生徒が、中世城館の位置、形態、種類、当時の目的、役割について、現地調査や郷土史家への聞き取り調査を実施して考察している。そして、行政と連携を図りながら歴史遺跡の活用方法についての提言をまとめている。そのような調査、提言を通して、生徒は、鎌倉幕府の体制として学んだ「総領制」や「分割相続制」について、中世城館を基に見直している。また、海からの攻めに備えて有明海に向けて城が建てられていることや、福岡と熊本の境界で要衝の地に建てられているといった城の位置について、自然や交通との関連の理解がなされている。城から当時の体制を読み解くことに歴史学習としての有効性が見出されている。

* 明石市立沢池小学校

令和3年7月16日受理

** 兵庫教育大学 名誉教授

(2) 江戸時代の城

江戸時代の城は、徳川政権によって打ち出された一国一城令や、武家諸法度の第六条によって、建築や補修、改築に関する統制がなされていたという特徴がある⁽⁷⁾。各地の大名は、縄張を示した絵図や立体模型（木図・塑図）を幕府に提出することまで義務付けられていたのである⁽⁸⁾。絵図とは、「平面に描いた城全体とその周辺の構成図⁽⁹⁾」をいう。木図とは、「木材でつくり彫刻で区画と壘壁の型を立体的にしたもの⁽¹⁰⁾」をいう。塑図とは、「紙粘土と糊でつくった立体模型⁽¹¹⁾」のことをいう。つまり、幕府は、各大名の城がどのような地理的な位置にあり、どのような「つくり」の城であるのかを平面や立体を通して確認をしていたことになる。

藤井譲治は、絵図の提出に関して、次のように述べている⁽¹²⁾。

將軍は、対外的緊張を一つの契機として国絵図・城絵図を作成させ、それを手にすることで、全国規模での軍事情報をいっきに掌握することに成功したのであり、大名にとってこれらの絵図の提出は、本来秘すべき軍事情報の提出強制であり、その結果大名に対する將軍の軍事的優位はいっそう深まった。

江戸幕府は、各地の城の位置や「つくり」を掌握、統制し、將軍の軍事的優位を深めることに成功していたのである。將軍の軍事的優位を深めることは、將軍と大名の主従関係を強固なものにする。

そこで、本研究における幕藩体制を、次のように定義する。

江戸幕府は、大名に対する將軍の軍事的優位を深めるために、各大名の城の軍事情報を掌握し、城の建築や補修、改築を統制していた。

千田は、江戸時代の徳川政権の城について、「家康の城もしくは徳川の城を考えることは、ある大名の城を解明するというだけでなく、近世幕藩体制を城から理解する意味をもつ。つまり城から近世社会を捉え直す試みでもある⁽¹³⁾。」と述べている。江戸時代に建築、補修、改築された城は、一国一城令や武家諸法度を発令した江戸幕府の体制に基づいている。したがって、その城の位置や「つくり」は、当時の江戸幕府の意図や目的が現れている。特に、幕府の命令によって新たに築かれた公儀普請の城（例えば、明石城）がある。そのような幕府の命令によって新しく築かれた城の位置や「つくり」には、当時の江戸幕府の意図、目的が直接現れている。江戸時代の城、特に、江戸時代に公儀普請によって築かれた城は、当時の支配者である徳川政権が実行した体制の具体を読み解く教材になる。

(3) 教科書での扱い

江戸時代の城は、教科書では、どのように扱われているのだろうか。

現行の小学校第6学年の教科書と中学校の社会科歴史的分野の教科書（小学校は令和2年版、中学校は令和

3年版）では、江戸城の絵図や外様大名による江戸城の普請、江戸幕府が発令した武家諸法度において、城に関わる内容が扱われている。一国一城令については、小学校の教科書の一社でのみ記述が見られ⁽¹⁴⁾、中学校の教科書では、扱われていない。

どの教科書においても、武家諸法度はその内容の一部が紹介され、小学校第6学年の教科書では、城を修理する時に幕府への届出が必要であること、中学校の社会科歴史的分野の教科書では、新しい城を築いてはいけないことについて明記されている。しかし、どの教科書においても、武家諸法度の城に関する内容が当時の城の位置や「つくり」に実際にどのように反映されているかについての考察は意図されていない。一国一城令や武家諸法度といった江戸幕府の政策を抽象的に知ることに留まっている。幕府の政策によって実行された城の築城や補修、改築の事実を考察することによって、その政策の具体を理解することが必要である。城は、当時の体制と直結する物質資料である。江戸時代の幕藩体制を理解する具体的な教材として開発を進めることが必要である。

(4) 本研究の意義

ここまで論じたように、城は、当時の人々の視点で、当時の体制を読み解く物質資料となり、時間的、地理的、政治的な理解を達成する歴史学習の教材価値をもつ。特に、江戸時代の城は幕府による統制がなされていたため、全国へと確立した幕藩体制の具体を理解する教材となる。

しかし、これまでの江戸時代の歴史学習では、文献資料から一国一城令や武家諸法度によって城の築城、修復に幕府の許可があることや、大名が使用する城以外は破壊されたといった統制に関する内容を知ることによって、なぜ江戸幕府が城の位置や「つくり」に対して築城、補修、改築の許可をしたり破壊の命令を出したりしたのかについて、城という物質資料から体制の具体を読み解くことはなされていない。江戸時代の城を教材化し、城から幕藩体制を読み解く歴史学習を開発することは、歴史学習の新たな一面を示す有意義な研究になる。

(5) 本研究の目的

本研究の目的は、次の三点である。

- ①江戸時代の城から幕藩体制を読み解く歴史授業を構成する。
- ②①の授業の構成に基づいて授業を実践する。
- ③②の実践を基に、有効性と課題を導き出す。

2 江戸時代の城から幕藩体制を読み解く歴史授業の構成

(1) 考察視点の設定

歴史学習として城をどのように考察すればよいかについて検討する。

鳥羽正雄は、築城には、「1地選（位置の選定）」「2地取（場所の選定）」「3経始（縄張）（平面形、立体形の企画および実施）」「4普請（土木工事）」「5作事（木

造建築工事)」の五つの仕事があると述べている⁽¹⁵⁾。「1地選」と「2地取」は、城を築く位置を選ぶことである。「3経始（縄張）」と「4普請」と「5作事」は、城をどのように築くかということである。

鳥羽は、地選について、「地選は、城の根本的重大事であって、これは築城主体者の意志によって決定される場所である⁽¹⁶⁾。」と述べている。また、城の位置について、鳥羽は次のように述べている⁽¹⁷⁾。

城はそれぞれ防衛上関係の地域があり、自然および人文（政治、軍事、財政経済、住民その他の関係）上、関係地域における位置を考慮して築造される。その位置は、城の価値、築城目的、任務などに重大な関係を及ぼすことになる。位置が不適当な場合には、なんら価値がないのみか、有害無益なことさえある。すなわち当該城郭と関連があると考えられる自然の地形と各種事情を、現地に立脚して考察することが必要である。

現在に残る城の位置は、築城主体者すなわち当時の支配者が、自然と人文（政治、軍事、財政経済、住民その他の関係）を考慮して選択、決定した結果である。したがって、結果として現れている現在の城の位置を自然と人文とを関連付けて考察することによって、当時の支配者の視点で、当時の意図、目的を読み解くことができる。と考える。

それでは、江戸時代の城の場合、自然と人文に関わる考察の視点は、どのように設定することができるであろうか。

自然の地形に関しては、土地の高低差を利用して、軍事的、政治的に機能が最大化されるように城が築かれる。山地、平地、丘陵地と、地形は現在も大きく変わることなく確認できる。したがって、江戸時代に築かれた城に関しても当時の自然の地形としてその高低を考察することが可能である。この考察視点を、「位置：①地形」とする。

また、鳥羽は、「城郭は付近の関連地域との関係において相対的に意義を有するものであるから、一城郭を考慮する場合、その付近の山嶽、丘陵、河川、湖沼、海洋、港湾、島嶼、天然の水利、道路交通などについても十分調査しなければならない⁽¹⁸⁾。」と述べている。つまり、山地や平地、丘陵地といった城が建つ場所の自然だけでなく、付近の山、河川、湖沼、海、島といった他の場所の自然との関係を考察することが必要である。この考察視点を「位置：②自然との関係」とする。

さらに、鳥羽が道路交通についての調査の必要性を述べているように、交通の面からの考察も必要となる。新谷洋二は、近世の城の特徴について、次のように述べている⁽¹⁹⁾。

近世の城においては、（中略：石田）、平野部の中央の平地または小丘陵地が一般に選ばれた。とくに城を中心に城下町を経営できることを条件の一つとした交通の便の点から、港町とは密接な関連を持つこと、重要な街道と連絡することが考慮された。

つまり、陸路と海路の両面を考慮して位置が選択されたことが分かる。この考察視点を、「位置：③交通（街道、

港）との関係」とする。

また、江戸時代に使用された城は、城と城下町が一体化する特徴がある。新谷は、城下町について次のように述べている⁽²⁰⁾。

近世において、大名の領国統一、兵農分離が進行するに伴って、家臣団や商工業者を全て城下に集めて、居住地を計画的に定めて、住まわせるようにしたため、城には必ず城下町を伴うようになった。すなわち、位置選定にあたっては、城だけでなく、城下町のことも考慮しなければならず、このように、近世の城の建設に際しては、それに並行して城下町の建設が実施されるようになった。

江戸時代の城は、城下町との一体化が意図されて建築されている。これは、軍事拠点としての城という役割だけでなく、都市としての城としての役割が意図されていることが分かる。この城下町との一体化に関する考察視点を、「位置：④城下町との関係」とする。

さらに、江戸時代の城は、複数の城の連携が意図されている。石田曜は、江戸時代に築かれた明石城について、次のように述べている⁽²¹⁾。

明石に築城された理由として、次の2点が挙げられる。①姫路城より西の外様大名を仮想敵国とした場合の後衛地となること、②元和元年（1615年）、初代城主小笠原忠真の姉婿・蜂須賀至鎮が阿波城主となった。つまり、淡路島は徳島領であったので、幕府は姫路藩、明石藩、徳島藩の軍事力によって西国の外様大名への備えとさせた。したがって姫路城が落城した際は、明石が第二の防衛戦になると想定されていたことが考えられる。また、姫路城、明石城、尼崎城によって三段構えの防衛体制をとったといえる。

姫路城・尼崎城・洲本城を線で結ぶと、（中略：石田）三角形が描ける。明石城は、この三角形のほぼ重心に位置する。明石における城下町建設の意義として、三つの城の重心という戦略的位置にあったことが確認できる。

明石城が築かれる際には、他の城との連携を考慮して位置を選択していたことが分かる。したがって、江戸時代の城は、同時期に使用された他の城との位置関係を考察することが必要となる。この考察視点を「位置：⑤他の城との関係」とする。後述する資料①⑦に示した。

次に、政治、軍事、財政経済、住民その他の関係に関して、江戸時代の城に関わる特徴から考察視点を見出すことにする。

江戸時代の城と政治、軍事に関しては、前章で述べたように、一国一城令や武家諸法度によって、幕府が各地の城の位置や「つくり」を掌握、統制していた。したがって、城の位置の選択、決定には、当時の支配者である江戸幕府の政治的な意図、目的が現れている。この政治的な考察視点を、「位置：⑥政治的な関係」とする。

ここまで論じた江戸時代の城の位置に関する考察視点を整理すると、次の表1のようになる。

表1 江戸時代の城の位置に関する考察視点

①	地形
②	自然との関係
③	交通(街道, 港)との関係
④	城下町との関係
⑤	他の城との関係
⑥	政治的な関係

一方、城の「つくり」にも当時の支配者の意図、目的が現れる。城郭歴史研究会は、縄張について、次のように述べている⁽²²⁾。

城の防御性を決定づける縄張は、築城する土地の地形を上手く利用しながら曲輪や堀などの位置を決めていくことが重要になる。つまり、丘陵や崖、川などの自然の要害を縄張に取り入れて、敵の攻撃から城を守る構造を構築していくのだ。

このような縄張がなされた後に普請、作事が実行される。したがって、城の曲輪や堀、建築物の配置を考察することによって、縄張の段階でどのような機能の城を意図したかを読み解くことができる。この考察視点を、「つくり：①縄張」とする。

また、先に述べたように、城に関わる絵図や立体模型(木図・塑図)の幕府への提出が強制されていたことから、具体的な建築物の「つくり」にも当時の支配者の意図、目的が現れる。防御力を高めるための門、曲輪、馬出、石垣、櫓、天守(天守台)と、すべてに支配者は意図、目的をもって建築をする。このような建築物に関わる考察視点を、「つくり：②建築物」とする。

ここまで論じた江戸時代の城の「つくり」に関する考察視点を整理すると、次の表2のようになる。

表2 江戸時代の城の「つくり」に関する考察視点

①	縄張
②	建築物

(2) 考察範囲

(1)で設定した江戸時代の城の考察視点は、その範囲を変化させることができる。例えば、「位置：①地形」では、城が建つ丘陵地と曲輪のある高低差を考察する場合と、他の城まで範囲を広げて、複数の城が位置する地形の高低差を考察する場合には、その考察範囲が異なる。また、「位置：②自然との関係」においても、城のすぐ横を流れる川と城の位置関係を考察する場合と、範囲を広げて他の川との位置関係を考察する場合とでは、考察に異なりが生ずる。したがって、(1)で設定した江戸時代の城の考察視点(表1, 表2)には、考察範囲の異なりを想定しておくことが必要である。

(3) 問いの構造

(1)(2)で設定した考察視点と考察範囲に基づき、社会認識形成を図る歴史学習を展開するには、どのような問いを設定すればよいであろうか。

社会認識形成には、社会事象を因果関係で理解することが必要である。因果関係での理解につながる問いは、「なぜ(Why)」である⁽²³⁾。また、城の築城主体は、当時の支配者であることから、江戸時代の場合、問いの主語は「江戸幕府」となる。したがって、当時新たに築かれた明石城の場合、「なぜ、江戸幕府は、明石城を築いたのだろうか」というなぜの疑問での問いを設定することになる。

しかし、これでは、その問いの答えが様々な要因に広がり、本質的な原因を導き出せない可能性がある。江戸時代の城の本質である(1)(2)で示した位置や「つくり」を考察して原因を導き出すことが、当時の城に関する幕藩体制を読み解き、城の築城という結果に対して因果関係で理解することにつながる。そこで、問いをさらに、「なぜ、江戸幕府は、そのような位置に、そのようなつくりの城を築いたのだろうか」と設定する。そうすることで、城の「つくり」を考察すること、城の位置を考察することに必然性が生まれる。そして、幕府の意図、目的を読み解くことから城の統制が図られた幕藩体制との関連の理解が達成される。

また、城の位置や「つくり」の具体を考察することにつながる問いも必要である。ここでは、「どのような(How)」の問いを設定する。そうすることで、城の位置や「つくり」を考察する必然性が生まれる。

江戸時代の城の位置や「つくり」を考察して幕藩体制を読み解く問いの構造は、次の図1のようになる。

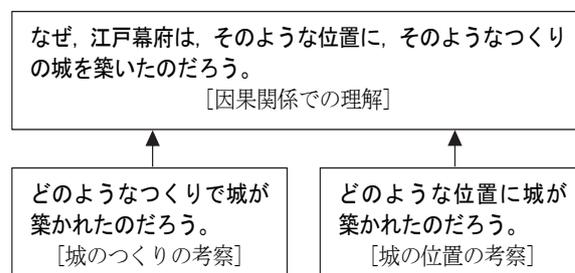


図1 城の位置や「つくり」を考察して幕藩体制を読み解く問いの構造

なお、因果関係での理解につながる「なぜ、江戸幕府は、そのような位置に、そのようなつくりの城を築いたのだろうか」という問いは、「なぜ、江戸幕府は、そのような位置の、そのようなつくりの城を破壊したのだろうか」と、江戸幕府の統制によって破壊された城の考察にも適用できる。

(4) 江戸時代の城から幕藩体制を読み解く枠組

(1) (2) (3) で論じたことを整理すると、次の表3のような枠組となる。

表3 江戸時代の城から幕藩体制を読み解く枠組

問い		考察視点	
なぜ、江戸幕府は、そのような位置に、そのようなつくりの城を築いたのだろう。	どのような位置に城が築かれたのだろう。	位置	①地形
			②自然との関係
			③交通（街道、港）との関係
			④城下町との関係
			⑤他の城との関係
			⑥政治的な関係
どのようなつくりで城が築かれたのだろう。	つくり	①縄張	
		②建築物	

*各考察視点の考察範囲は、狭いものから広いものへと変化可能

(筆者作成)

(5) 授業の展開方法

ここまで論じてきた江戸時代の城から幕藩体制を読み解く枠組(表3)に基づくと、次の図2のような学習過程になる。

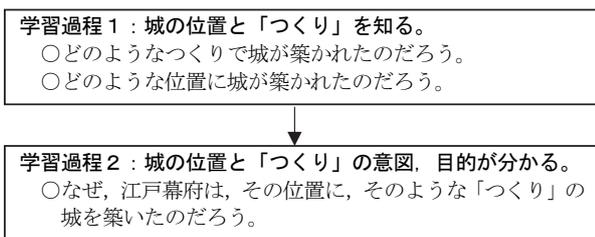


図2 城の位置と「つくり」から幕藩体制を読み解く学習過程

学習過程1において、児童は、城の位置と「つくり」について事実を知ることになる。そして、学習過程2において、なぜの問いから当時の支配者の意図、目的を読み解く。こうすることによって、城を築いた原因と築かれた位置や「つくり」の結果を、因果関係で理解することができると思われる。

この学習過程を授業に組み込んで、幕藩体制を読み解く社会科授業を構成する。

3 授業実践 —明石城の場合—

(1) 明石城の教材価値

江戸時代に新規に築かれた城であれば、江戸幕府の意図、目的が直接的に反映されている。

そこで、着目したのが、明石城である。明石城は、1619年(元和5年)に江戸幕府の二代将軍である徳川秀忠が費用を出して築いた公儀普請の城である。関ヶ原以前に豊臣氏に従属していた大名を監視し、その大名による幕府へ反乱を阻止するという江戸幕府の目的がある。同時期に築かれた尼崎城と合わせ、姫路城、明石城、

尼崎城の「三段構えの防衛体制⁽²⁴⁾」によって、西国や四国に配置した外様大名への備えが意図されている。明石城は姫路城、尼崎城の中間であり、陸路と海路の要衝に位置する特徴をもつ。特に、明石城は、以前に存在していた城を修築するのではなく、新規の土地に築かれている。このことから、その位置と「つくり」の選択、決定には、徳川政権の意図、目的が直接的に反映されているといえる。また、明石城は、蟹坂(かきがさか、今の和坂)、人丸山(現在明石城が建っている場所)、塩屋(人丸山より東)の三つの候補地の中から、徳川秀忠によって人丸山が選択されたという記録が残されている⁽²⁵⁾。したがって、当時の築城候補地の位置を現在の位置で確認しながら考察することが可能である。このように、明石の人丸山という位置を選択、決定した理由を考えることによって、明石城が築かれた原因となる江戸幕府の意図、目的を読み解くことが可能になる。

(2) 知識の構造

表3の江戸時代の城から幕藩体制を読み解く枠組に基づき、明石城を事例として知識の構造を示す。

◎概念的知識

支配者は、政治目的を達成するために意図をもって位置と「つくり」を選択、決定して建造物(ここでは城)をつくる。

○説明的知識

江戸幕府は、次の意図、目的で新しく明石城を築いた。

(意図)・姫路城と尼崎城の中間で、淡路島の北にあたる明石に城を築いて外様大名に対する監視、防衛の体制を高める。

・人丸山に城を築き、丘陵地から西の街道や南の海を通る大名を監視したり、西や南から来る大名を、明石川を挟んで迎え撃つたりする。

(目的) 外様大名が江戸幕府へ反乱できないようにする。

●記述的知識・分析的知識

[位置：①地形]

・六甲山系の西端の丘陵地で、その西を流れる明石川よりも高いところに築かれている。だから、西の街道や海を上から見下ろすことができる。

・明石川の西には、人丸山と同じ高さの台地が広がっている。だから、西から街道を通して来る敵の動きを見ることができる。

[位置：②自然との関係]

・西と北の明石川、東の両馬川、南の海に囲まれた場所に築かれている。だから、敵がどの方向から攻めて来ても川を挟んで守ることができる。

[位置：③交通(街道、港)との関係]

・西国街道の通る位置で、城と城下町を築く際に、外堀より南の海側に西国街道を付け替えている。だから、人は外堀の外側を歩いたり、街道から城を見た

りすることになる⁽²⁶⁾。

[位置：④城下町との関係]

・城の建つ人丸山と海の間で城下町を形成することで、外堀で、武家屋敷と足軽・組屋敷、町屋、寺・社地を区分している。

[位置：⑤他の城との関係]

・姫路城と尼崎城の間で、淡路島の北に築かれている。だから、他の城と連携して西国や四国の外様大名に備えることができる。

[位置：⑥政治的な関係]

・江戸幕府は、1615年に一国一城令と武家諸法度を出して全国の城を制限した。その中で、明石城には銀1000貫目を出費して公儀普請によって城を築いている⁽²⁷⁾。

・明石には江戸時代以前から船上城があったにもかかわらず、その城を廃城にして、明石城を築いている。
・幕府は、本多忠政(姫路藩主・譜代)と小笠原忠真(明石藩主・譜代)に候補地を挙げさせ、和坂、人丸山、塩屋の三つの候補地の中から、西の方向や海を監視できる人丸山を選んでいる⁽²⁸⁾。

[つくり：①縄張]

・川と海、堀を利用して「総構え型」の城として守りを固めている。

[つくり：②建築物]

・天守は築かれず、天守台が、西向きに張り出している。
・天守台の西下に曲輪があり、西側から本丸に上がりにくく、西側には、逃げられないようになっている。
・本丸、二の丸、三の丸は、東に向かって順同じ高さでつながっている。
・南西の坤櫓が天守の役割をし、その窓は、西と南に広がっている⁽²⁹⁾。

(3) 本授業で使用する資料

本授業で使用する資料については、(2)の知識の構造に基づいて、精選、加工する。

まず、明石城がどの時期に、誰によって築かれた城であるかを確認した後、城の「つくり」を考察する。資料として、現在の明石城の写真と当時の明石城の「つくり」が分かる携帯アプリの画像(資料⑦-1, 資料⑦-2(30))を使用する。政治的な関係の理解を図るため、天守台が西側にだけ張り出していること、天守台の西下は低くなっていること、天守台、本丸から東は同じ高さが続いていることを確認する。

次に、学習課題となるなぜの問いを引き出すために、以前からある船上城(明石川の西側、海岸の近く)を取り上げる。明石には船上城があるのに、なぜ新しい城をなぜ築くのかという矛盾からなぜの問いを引き出す。

なぜの問いを設定した後、仮説の設定と検証に進む。このときに使用する資料として、西国で使用されていた城とその土地を治めていた大名の配置(資料④)、姫路城から尼崎城までの地形図、明石城の建っている場所の付近の積層模型(資料⑤)を用意する。資料④の西国で

使用されていた城とその土地を治めていた大名の配置は、譜代大名と外様大名が意図的に配置されていることを、城の位置、「つくり」を関連させて理解するための資料である。考察視点の「位置：⑤他の城との関係」「位置：⑥政治との関係」に基づいている。姫路城から尼崎城までの地形図は、明石城が姫路城と尼崎城の間に位置付くことを考察するためである。考察視点の「位置：①地形」「位置：⑤他の城との関係」に基づいている。資料⑦の積層模型は、考察視点の「位置：①地形」「位置：②自然との関係」「位置：③交通との関係」「位置：⑤他の城との関係」に基づいている。和坂と人丸山と塩屋という三つの候補地の中から人丸山を選択することには、地形の高低、川や街道との位置が関係している。和坂と人丸山は、同じ土地の高さである。しかし、明石川の東にあるか、西にあるかによって西国に配置された外様大名からの攻撃に対する状況が変わる。明石川の東の人丸山に城を築くことで、明石川を自然の堀として利用したり、明石川に差し掛かった外様大名を一旦低い土地へと追いやって高い土地から見下ろしたりできるようになる。明石川の西の和坂では、このような状況が発生せず、同じ高さで外様大名と接することになる。和坂と人丸山は、城を築く位置として対称的な違いがある(資料⑤)。そこで、授業では、和坂と人丸山の二つに限定して、考えさせるようにする。和坂と人丸山、その二つを挟む明石川、廃城となった船上城、西国街道を積層模型に示す。

なお、本授業では、「位置：④城下町との関係」を扱わないことにする。その理由は、次の点である。江戸幕府の当時の政治目的が、配置した外様大名に備えることであり、その目的を達するために、城の位置や「つくり」を統制したという理解を図るためである。城下町の形成という考察視点をあえて省くことで、当時の江戸幕府の体制へと視点を向けて読み解く学習が展開できる。

また、授業で扱う資料は、考察範囲が異なるように考慮する。考察範囲を狭めて明石城の付近の自然や交通の関係を考察したり、考察範囲を広げて他の城との位置関係から考察したりすることができるようにする。

(4) 授業の展開

先に示した図2の学習過程と資料に基づいた授業の目標と展開を、次に示す。

①目標

江戸幕府が次の意図、目的で新しく明石城を築いた理由が分かる。(知識)

【意図】・姫路城と尼崎城の間で、淡路島の北にあたる明石に城を築くことによって外様大名に対する監視、防衛の体制を高める。

・人丸山に城を築くことで、丘陵地から西の街道や南の海を通る大名を監視したり、西や南から来る大名を、明石川を挟んで迎え撃つたりする。

【目的】・外様大名が江戸幕府へ反乱できないようにする。

②展開

学習過程		◎学習課題	○主な問い	・主な学習活動	資料〔提示方法〕
学習過程 1	築城時期と築城主体者の学習	○明石城はいつ、誰が築いた城だろう。 ・明石城が、1619年、江戸幕府の二代将軍である徳川秀忠によって築かれた城であることを確認する。 ・明石城が譜代大名の城であることを確認する。			・徳川秀忠の肖像画〔紙で黒板に提示〕
	城の「つくり」の考察	○どのようなつくりで明石城が築かれたのだろう。 ・天守台が西側だけに張り出していることを確認する。 ・西曲輪と本丸は高低差があることを確認して、本丸から西側には逃げられないことを確認する。			・明石城の写真〔紙で黒板に提示〕 ・明石城のCG（資料㉗）〔携帯アプリをテレビで提示〕
	城の位置の考察	○どのような位置に明石城が築かれたのだろう。 ・姫路城、尼崎城の中間に築かれていることを確認する。 ・明石川の東側の丘陵地に築かれていることを確認する。 ・西国街道の通り道に築かれていることを確認する。 ・和坂と人丸山という候補地の中から、人丸山が選択されたことを確認する。			・他の城や大名との位置関係（資料㉘）〔紙で黒板に提示〕 ・明石城の位置〔紙で黒板に提示〕 ・積層模型（資料㉙）〔模型を黒板に提示〕
学習過程 2	意図、目的の読解	◎なぜ、江戸幕府は、人丸山という場所に、新しく明石城を築いたのだろう。 ・江戸幕府が一国一城令によって、各地の支城を約170まで廃城にしたことを確認する。そして、明石城は、その逆に、以前まであった船上城を取り壊して、江戸幕府が費用を負担して新しく建築されたことに矛盾を感じさせ、なぜの問いを引き出す。 ・位置とつくりの資料から読み取ったことを関連付けて、江戸幕府の意図、目的を読み解く。			・一国一城令の発令前と後の城の数のグラフ〔紙で黒板に提示〕
<p>●期待する学習課題の解〔知識〕</p> <p>①姫路城と尼崎城の中間の明石に城を築くことで、西国や四国の外様大名への守りを高めることができる。</p> <p>②人丸山に城を築くことで、高いところから西の街道や南の海を通る外様大名を監視したり、明石川を堀にして戦ったりすることができる。</p>					

③資料

[城のつくり]に関する資料

資料㉗-1：曲輪，本丸，堀〔①縄張〕



(30)の携帯アプリより引用

資料㉗-2 : 天守台と西曲輪 [②建築物]

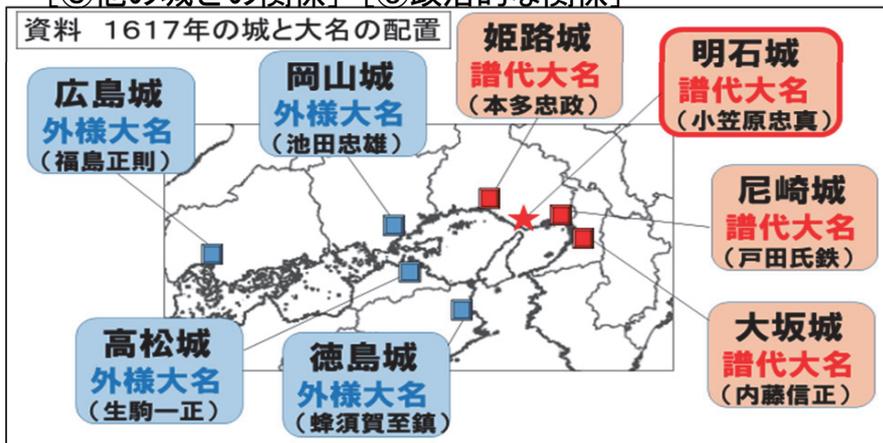


(30)の携帯アプリより引用

[城の位置] に関する資料

資料㉘ : 1617年の城と大名の配置

[⑤他の城との関係] [⑥政治的な関係]



((31)を参考に作成 : 筆者)

資料㉙ : 明石城付近の積層模型

[①地形] [②自然との関係]

[③交通との関係] [⑤他の城との関係]



((32)を基に作成 : 筆者)

4 授業実践の考察

本研究で構成した授業を、第6学年の3学級の児童を対象に実践した。

授業者の発言や児童の発言、資料の扱いによって城に関する考察視点を与えられた児童が、どのように記述したのかを分析する。方法としては、学習カードの記述を、本研究で設定した城の考察視点に基づいて分析する。

分析の結果、次の表4の結果となった。児童の記述例に関し、城の位置に関する記述には直線の下線、城の「つくり」に関する記述には、波線の下線を引いた。

児童の記述から分かったことは、複数の考察視点を関連付けて理解している児童がいたことである。時間的な考察とともに、当時の江戸幕府が配置した大名に対して城の位置や「つくり」を選択、決定していたという政治的な考察、そして、城の地形や付近の自然との関係といった地理的な考察が、関連付けてなされているといえる。

城の位置に関しては、「位置：①地形」の考察視点で記述している児童が、全体で83人中70人（約84%）いることが分かった。これは、資料として、積層模型（資料⑦）を使って土地の高低差を示したことが地形との関係の理解に働いたと推察する。また、「位置：⑥政治的な関係」の考察視点で記述している児童が、全体で83

人中57人（約69%）いることが分かった。この児童は、他の城とその土地を治める大名と、明石城の位置を関連付けて理解したといえる。城の位置と当時の政治とを関連付けて理解することは、小学校段階の児童においても十分可能であると考えられる。ただし、政治との関連付けは、地形との関連付けよりも捉えることが難しい傾向が見られた。さらに、「位置：③交通との関係」「位置：⑤他の城との関係」、「つくり：①縄張」「つくり：②建築物」についての記述が少ない結果となった。これは、本授業の学習課題に原因があったと考える。本授業の学習課題は、「なぜ、江戸幕府は、人丸山という場所に、新しく城を築いたのだろうか」であった。この学習課題では、日本各地の候補地の中から明石という位置を選んだということを考えるのではなく、明石の中の人丸山という位置をなぜ選んだのかを考える問いとなっている。そのため、資料⑦の明石城付近の積層模型を基に、人丸山の地形を中心に考察がなされたと推察する。

城の「つくり」に関しても、学習課題が原因であったと考える。本授業の学習課題が位置に関する解を求める問いになっているため、城の「つくり」を原因として導き出す必要がなかったと推察する。

表4 城の考察視点に関わる児童の記述の傾向（全児童83人）

児童		6-1(28人)	6-2(27人)	6-3(28人)	合計(83人)
城の考察視点		人数(人)	人数(人)	人数(人)	人数(人)
位置	①地形	22	21	27	70
	②自然との関係	20	17	9	46
	③交通との関係	8	0	5	13
	④城下町との関係	0	0	0	0
	⑤他の城との関係	6	7	6	19
	⑥政治的な関係	19	20	18	57
つくり	①縄張	0	6	3	9
	②建築物	3	2	2	7
児童	記述例				
6-1 児童6	西側に敵(外様)がいるから[位置:⑥政治]。西向きに天守台[つくり:②建築物]。海に近い[位置:②自然]。高い一見下ろせる[位置:①地形]。人丸山の方が高い[位置:①地形]。上から見下ろせるから[位置:①地形]。和坂から攻撃に来て、明石川を渡って[位置:②自然]。上に登らないといけない[位置:①地形]。				
6-1 児童21	外様が敵になったとき[位置:⑥政治]、姫路城が少し対応してくれて[位置:⑤他の城]、山が高い分[位置:①地形]、自分たちの準備ができる。川をはさんでいるから[位置:②自然]、姫路城がやられたら[位置:⑤他の城]、川があるから[位置:②自然]、まちかまえられる。海からせめてこられても見えない位置[位置:②自然]が人丸山。西からせめてきても、川や山をおりたりのぼったりしないといけない[位置:①地形]のが人丸山。さんきんこうたいの通り道[位置:③交通]になって、上から見える[位置:①地形]のが人丸山だったから、すべての方角からせめられても対応できるのが人丸山だったから。				
6-2 児童15	高さが急という理由[位置:①地形]で新しく明石城を築いたのではないか。外様大名たちが西から攻めてくる[位置:⑥政治]から、真ん中に川をはさみ[位置:②自然]、攻めにくく高い急な山から監視できる[位置:①地形]ようにした。				
6-2 児童23	船上城は海に近くて[位置:⑤他の城]、標高が低いから、標高がちょっと高い人丸山に[位置:①地形]城を作ってせめられないようにした。西から来た外様大名に[位置:⑥政治]有利な土地を選んだ。南からも強い。				
6-3 児童13	土地の高さが人丸山の方が高く[位置:①地形]、山の方が守りやすいから。西からくるのに、川があり、もうひとつの山だと川がなくせめやすい[位置:②自然]。人丸山の方が、外様がせめてきたときに[位置:⑥政治]、守りやすく、敵は西からくるので[位置:⑥政治]、川[位置:②自然]や道[位置:③交通]がある。もうひとつの山だと[位置:②自然]、それがなくせめられる。人丸山は上から打てたりするので、人丸山に城をたてた。				
6-3 児童20	船上城では[位置:⑤他の城]土地が低すぎた[位置:①地形]。山だから木などもあって守りやすい。にげやすい。外様、西。譜代は、東だから[位置:⑥政治]。人丸山は土地が高く[位置:①地形]、せめられにくいから。江戸幕府は外様大名をけいかいして、その外様大名は西にいるから[位置:⑥政治]、西向きに天守台をつくる[つくり:②建築物]新しい城を築いた。				

5 本実践の有効性と改善点

本実践では、築かれた城の位置や「つくり」を考察することによって、幕藩体制と城の具体が関連付き、時間的、地理的、政治的な視点での理解が達成されるという傾向が見られた。小学校段階の児童においても、城を時間的、地理的、政治的な視点で考察し、関連付けて理解することは十分可能であることが分かった。

しかし、本実践を通して改善すべき点も明らかになった。それは、城の位置に関する学習課題である。位置といっても、全国から見た明石という位置と、明石の中の人丸山という位置では、同じ城の位置でも、考察範囲や考察視点が異なる。そこで、改善として、「なぜ明石に築いたのだろうか」と「なぜ明石の中でも人丸山に築いたのだろうか」と、城の位置の考察範囲を広いものと狭いものとに分けて段階的に問うようにする。そうすることで、当時の交通や、他の城との関係の考察を促進できたのではないかと考える。

6 本研究の成果と課題

本研究の成果は、次の三点である。

- (1) 城の位置と「つくり」に着目して、江戸時代の城から幕藩体制を読み解く枠組を設定することができた。
- (2) 設定した枠組に基づいて、江戸時代に築かれた「明石城」を教材化し、幕藩体制を読み解く小学校歴史授業を構成することができた。
- (3) 構成した授業を実践し、有効性と改善点を示すことができた。

課題は、次の一点である。

- (1) 城の位置の考察範囲と考察視点を再検討し、新たな授業の開発、実践を通して検証する。

注・引用文献

- (1) 千田嘉博 (2021) 『城郭考古学の冒険』幻冬舎
- (2) 千田嘉博 (2015) 『真田丸の謎 戦国時代を「城」で読み解く』NHK 出版, p.180
- (3) 城の「つくり」とは、外敵を防ぐために建築された具体物のことをいう。例えば、石垣、塀、堀、天守、天守台、狭間、櫓、曲輪、御殿などがある。
- (4) 山本博文 (2013) 『歴史をつかむ技法』新潮社, p.53
- (5) 前掲書 (3) p.203
- (6) 福田喜彦 (2008) 地域の歴史遺産を活用した日本史学習－荒尾市の中世城館の調べ学習を通して－, 歴史地理教育 728, pp.54-57
- (7) 高柳光寿 (1970) 元和一国一城令 『高柳光寿史学論文集 (下)』吉川弘文館, pp.370-397
- (8) 西ヶ谷恭弘 (2008) 城の立地と構成, 『城郭の見方・調べ方ハンドブック』東京堂出版, p.97
- (9) 前掲書 (8) p.97
- (10) 前掲書 (8) p.97
- (11) 前掲書 (8) p.97

- (12) 藤井譲治 (1991) 平時の軍事力, 『日本の近世第3巻 支配のしくみ』中央公論社, pp.99-134, p.132
- (13) 前掲書 (2) p.194
- (14) 北俊夫, 小原友行ほか (2021) 『新しい社会6 (歴史編)』東京書籍 p.77に「一国一城令」の記述が見られる。
- (15) 鳥羽正雄 (1980) 日本城郭史の研究, 『日本城郭史の再検討』, 名著出版, pp.3-83, p.21
- (16) 前掲書 (15) p.21
- (17) 前掲書 (15) p.98
- (18) 前掲書 (15) p.99
- (19) 新谷洋二 (1991) 『日本の城と城下町』, 同成社, p.163
- (20) 前掲書 (19) p.161
- (21) 石田曜 (2010) 近世明石における城下町プラン, 歴史地理学, 52-5 (252) pp.43-55, p.45
- (22) 城郭歴史研究会 (2020) 『日本の城のひみつ』メイツ出版, p.16
- (23) 岩田一彦 (1991) 問い・知識の分析と授業設計, 『小学校社会科の授業設計』東京書籍, pp.33-45
- (24) 前掲書 (21) p.45
- (25) 中野直行 (2000) 明石城の築城, 『講座明石城史』神戸新聞総合出版センター, pp.154-179
明石城の城地の決定および候補地 (塩屋・蟹坂・人丸山) については、初代城主小笠原忠真の事跡をまとめた『忠真公御一代の覚書』と、それを整理してまとめた『清流話』に記述が確認される。
- (26) 前掲書 (25) pp.168-169, p.175
- (27) 前掲書 (25) p.175
- (28) 前掲書 (25) p.174
- (29) 堀田浩之 (2000) 明石城の規模－城郭プランについて－, 『講座明石城史』神戸新聞総合出版センター, pp.180-201, p.190
- (30) 明石城の「つくり」については、携帯アプリ「明石城巡り」USAC SYSTEM CO.,LTD. を使用した。
- (31) 山本博文 (2013) 幕藩体制, 『江戸時代館』小学館, pp.58-59
- (32) 国土地理院地図 自分で作る色別標高図 1:100000 (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran/html>〔最終閲覧: 2020.11.2〕)